

SNS を使った異文化交流

- 英語教育・教員養成と日本語教育の視点から -

黒川直子*1・篠崎文哉*2・上田愛*3・吉田晴世*4

Email: kurokawa@duke.edu

*1: デューク大学アジア中東学科日本語プログラム

*2: 大阪教育大学附属天王寺中学校

*3: 大阪府立長野高等学校

*4: 大阪教育大学英語教育講座

◎Key Words 語学, SNS, 異文化交流

1. はじめに

現代において ICT は多岐にわたる教育分野で活用されているが、外国語教育もその例外ではない。特に SNS は日常生活の中に定着しており、コミュニケーションの手段として世界規模で利用されているため、当該分野においても従来の教室の枠を超えて目標言語・文化の母語話者と交流を図る手段としてその活用が益々盛んになっている。一方で、学習者のプライバシーに対する配慮やアクセス対象、エラー訂正の方法等を含め、いかに SNS を教育目的に利用し、学習効果を高めていくかは多くの教師が試行錯誤を重ねている段階ではないかと思われる⁽¹⁾。

外国語教育は言語運用能力の育成と異文化理解能力の育成に大きく分けることができる⁽²⁾。しかし、双方は切り離せない関係にあるため、両者を兼ね備えた異文化間コミュニケーション能力を伸ばすことが求められる⁽³⁾。外国人居住者の数が年々増加しており、一昔前に比べればいわずの内なる国際化が進んでいると言えるが、依然として国内で勉強する学生が異文化に触れる機会は十分とは言えない。加えて、通常の授業内でもこういった能力を育成していくことは困難であるため、より直接的かつ効率的に異文化に触れられる機会を設けることが求められる。このような条件下では、SNS を用いることが効果的だと考えられる。SNS を活用するメリットとして、時間や地理的な問題を軽減ないし解消してくれるということが挙げられる⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

具体的な実践例も数多く報告されている。ラング (2009)⁽⁶⁾や日木・Elizabeth (2010)⁽⁷⁾、塩見 (2013)⁽⁸⁾ は SNS を利用し、海外の学生と交流を図っている。本論文では、大阪教育大学の英語教員養成課程に在籍する学生と米国ノースカロライナ州にあるデューク大学で日本語を学ぶ学生がブログや Skype といった SNS を通して行った異文化交流の試みについて報告する。本交流に至った経緯とこれまでの活動について紹介し、SNS や異文化交流が果たす役割や語学教育への効果について、英語教員養成の指導者と日本語教師のそれぞれの視点から考察を行う。

2. 交流に至った経緯と活動の概要

2011 年度の秋学期から 2013 年度春学期に至るまで、

大阪教育大学の英語教員養成課程の指導者とデューク大学の日本語教師は、ブログやメール、Skype を通じてそれぞれの学生同士が参加する交流活動を企画し、実施してきた。交流には、デューク大学からは上級日本語コースを履修中の学生（学部生を主体とし少数の大学院生も履修）が、大阪教育大学からは英語教育専攻の大学院生と学部生（メールでの交流時のみ）が参加した。参加人数は学期で異なるが、デューク側は 5 名～15 名、大阪教育大学側は大学院生が 4 名前後で、学部生は 10 名前後であった。なお、デューク大学の学生は授業の一環として活動を行ったが、大阪教育大学側は自由意思により参加した。使用言語は補足説明等がなされる場合を除き基本的に日本語であった。なるべく滞りなく交流を進めるため、デューク大学は大阪教育大学とシラバスを共有し、大阪教育大学は日本語授業で使われる教科書を入手し事前に扱われる内容を把握していた。以下、事前準備を含めた本交流の流れをフローチャートで表す（図 1）。

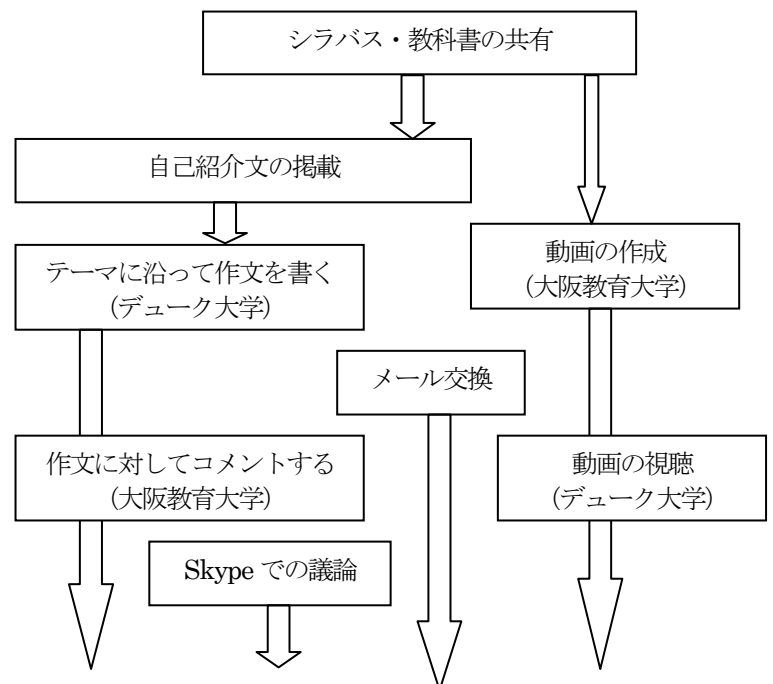


図 1 交流の流れ

3. 使用媒体別活動内容

交流には複数の媒体が使用された。媒体別ごとの活動内容を表1にまとめ、その詳細を以下に記す。

表1 使用媒体別活動内容

使用媒体	活動内容
WordPress	■ 学期初めの自己紹介
	■ 指定されたテーマに基づいて作文を書く (デューク大学)
	■ 書かれた作文にコメントをする (大阪教育大学)
メール	■ 一対一でメールを交換
	■ 個々人でやり取りの内容は異なる
Skype	■ 事前に決められたテーマについての記事を読んでおく
	■ 交流当日、読んだ記事について議論を行う
Blackboard & Sakai	■ 指定されたテーマに基づいて動画を作成 (大阪教育大学)
	■ 動画を視聴し課題を行う (デューク大学)

3.1 WordPress による交流

主交流方法として、ブログツールである WordPress を使用した。WordPress はオープンソースのブログソフトウェアであるため、ユーザーは比較的自由にアレンジを加えることができる。特に本交流においては写真等を含む個人情報を多数扱っていたため、セキュリティ面を考慮した設定を行なった。

活動としては、まず基本的に各学期の初めお互いに写真付きの自己紹介文を掲載した。その後から数回にわたり、デューク大学側は与えられたテーマに沿って作文を書き、大阪教育大学側はそれに対しコメントをすることで意見の交換活動が行われた。テーマは、基本的にデューク大学が日本語授業で使用していた教科書の内容を中心に設定された。表2は学期ごとにWordPressに掲載されたテーマをまとめたものである。

表2 学期別使用テーマ

期間	テーマ
2011/2012 年度 秋学期	自己紹介、宗教、日本文化、好きな映画/物語の紹介、趣味、大学の専攻、20年後の社会
2012/2013 年度 春学期	冬休みの活動・新年の抱負、タイムマシンで行きたい時代、影響を与えた人出来事、自国の問題

3.2 メールによる交流

上記のブログと並行して、日本語学習者と日本人学生との一対一のメール交換が行われた。各学期、平均4往復のメール交換がなされた。それぞれ文化などに関する情報の交換や日々の生活の中で起こったことや感じたことなどについて自由なやり取りが行われた。具体的なやり取りの内容は個々人で異なるが、例えば好

きなドラマや音楽をはじめ、将来の夢や勉学のことなど私的な内容が多かった。

3.3 Skype による交流

まず日本側とアメリカ側の学生がそれぞれ議論に使用する記事を選び、交換した上で議論に備えた。記事は大学の進学率、オタクの婚活といった内容のものが選ばれた。交流当日は少人数のグループになり、Skypeを使用し日本語で記事のテーマに関する議論を行なった。お互いに言語面での気づきがあっただけでなく、意見の類似性や相違性などを知ることができ多方面において得られるものがあつた。

Skypeの実施において留意すべき点は時差である。ビデオ通信でのリアルタイム交流になるため、あらかじめ教員間でスケジュールを決定し、円滑に交流が行われるよう取り計らう必要がある。

3.4 その他の活動

大阪教育大学側は、日本語の教科書のテーマがデューク大学での授業で扱われる前に各テーマに関して議論した様子を録画し、動画をDropbox経由で提供した。デューク大学の日本語教師は提供された動画に基き内容確認のワークシートを作成し、必要に応じ語彙表等も追加した上で教材化し日本語学習者に配信した。動画作成者のプライバシーへの配慮から配信はコース履修者のみがアクセスできるコースマネージメント・システム (Blackboard 及び Sakai) を使用した。表3は動画で扱われた内容の一例である。

表3 教科書のテーマと動画の内容

日本語授業の教科書のテーマ	動画の内容
日本の宗教	神社での参拝、日本人の宗教観や自らの宗教的習慣や経験について議論
日本の便利な店	コンビニの取材と利用に関する説明、関西弁を話す自動販売機
日本の伝統芸能	伝統芸能にまつわる経験やイメージに関する議論
日本の歴史	好きな歴史的人物に関する説明
日本の政治	最近行われた選挙の結果や投票の傾向に関する議論

次に、本活動において SNS や異文化交流が果たす役割と語学教育に関して、英語教員養成の指導者と日本語教師による見解をそれぞれの視点で論ずる。

4. SNS や異文化交流が果たす役割

4.1 英語教員養成課程の指導者による視点

大学に留学生が在籍しているとはいっても、日本人の学生が普段から留学生と交流する機会は多くはない。今回のような SNS を利用した活動は定期的に行われるため日常生活に馴染みやすく、日本にいながら異文化を実感できる機会の増加に繋がった。アメリカに住んでいる学生が日本のどのような点に興味を持っているのかを知ることができ、また日本とアメリカとの文化

の違いや物事に対して考える姿勢の違いなどを改めて実感することができた。内に閉じこもってれば視野は広がらず、日本や自身の誇れるものも正しく認識することができない。だからといって、日本を飛び出して海外へ行くというのは時間もお金もかかるため簡単ではない。SNS を用いた異文化交流活動の大きな役割の一つは、異文化に関する知識を単に身につけさせるだけではなく、異文化の存在をより身近なものとして実感する機会を与えるということではないかと考えられる。

大阪教育大学からの参加者は、中学校または高等学校の教員志望であったため、冒頭で述べたような異文化間コミュニケーション能力の伸長は個々人の課題であった。単純に異文化を持つ相手と交流すれば、そのような能力が自然と涵養されるわけではない。書かれている内容を咀嚼し、その意見を尊重した上で自分なりの考えを表すことが肝要であり、異文化理解の第一歩であると言える。

4.2 日本語教師による視点

日本から海外へ留学する学生数の減少が伝えられて久しいが、デューク大学においても近年は日本からの学部留学生がほぼ皆無という状態である。よって日本に留学する時間的・経済的余裕がない日本語学習者にとっては、学んだ言語を実際の世界で使用し同世代の日本語話者と関係を構築する機会は得にくくなっている。日本語教師、日本人の客員教授や大学院生などと話す機会を活用する学習者もいるが、そのような相手は日本在住の若者とは興味の対象や視点が少なからず異なる場合もあるだろう。

今回の SNS を利用した活動はそのようなアメリカの日本語学習者にとって、物理的な距離を超えて目標言語・文化圏の同世代の学生達と直接やり取りを行う貴重な機会となった。授業に日本在住の学生達の視点を取り入れることで、学習者は扱われたテーマをより身近なものとして咀嚼し吸収することが可能になったものと思われる。例えば日本の伝統芸能について扱った課では、大阪教育大学の学生達が「伝統芸能については詳しくないし特に興味もない」と話した動画をきっかけに、デュークの学生は伝統芸能の将来や、その魅力を大衆にアピールする方法などを自らに関連づけて考えることが可能となり、活発な議論につながった。また、日本の歴史を扱った課では大阪教育大学の学生が坂本龍馬について語った動画を見て、興味を喚起されたあるデュークの学生が自ら『龍馬伝』の動画を探し視聴するようになるなど、学習内容について個人的に興味を広げるきっかけにもなった。やはり日本在住の同世代の若者が自分の言葉で語った情報は教科書などを通して学んだ事柄より身近で親しみやすいものとして伝わるのであろう。

このような交流活動は異文化の理解だけではなく自らの文化への気づきの機会ともなることが過去の実践や研究でも報告されているが⁹⁾、この活動においても口頭、書き込みを問わず互いの文化に関心を持ち、自らの文化について真摯に説明する場面がよく見られた。特にデュークの学生にとっては習得中の言語を使って

相手に分かりやすく説明するというチャレンジを伴うものとなったが、グローバル言語である英語を自然習得したアメリカの学生が非母語話者の視点や立場を理解する上でも貴重な機会となったのではないだろうか。

5. 語学教育への効果

5.1 英語教員養成課程の指導者による視点

言語教育においては、今回は日本語母語話者である大阪教育大学の学生はほぼ日本語のみを使用していたため英語力が向上したということは考えにくい。しかし、どのような日本語を使えば言語学習者相手に伝わりやすいのかという言葉の選択の大切さを学ぶことができた。このことは言語の種類に関係なく、コミュニケーションを図る上で最も重要なことの一つである。加えて、今回の交流のようにブログ上で行うことで、相手の語学力が刺激となり、自身の語学学習における意欲向上にも繋がる可能性も考えられた。

英語の指導に関しては、今回は日本語教育が主な目的であったが、これを参考に英語をメイン言語とし交流を図ることで様々な能力の育成が可能であると考えられる。例えば、複数人に閲覧されるブログで文章を書くということはライティング時の正確性の向上に繋がり、更に単語を調べてから書くことが予想されるため語彙力も強化されるだろうと思われる。また、Skype 交流を実施しディスカッションやディベートを行えば即興性の強い実践的なスピーキング能力を育成できる。時差の関係上、リアルタイムでの交流が困難な場合でも設定されたテーマに基づいて意見を発信するような動画作成をすれば、即興性は多少失われるものの発音やプロソディ、ひいてはスピーキング時の正確性の向上が期待できる。

5.2 日本語教師による視点

デューク大学の参加者は過去二年間の学習で基本的語彙や文法の習得は終えた段階にあり、母語話者と日本語で交流することで既習事項を応用し運用能力を養うことができた。また生の日本語に触れることで、教科書とは異なる自然な日本語（関西弁を含む）に親しむ機会にもなった。

活動で使われた技能は多岐にわたり、様々な言語能力が要求された。例えば WordPress では相手に分かりやすく作文を書く能力に加えてコメントを理解し適切な返事を書く能力、Skype ではテーマに関して相手の論旨を理解した上で自分の意見を分かりやすく伝える話力に加え適切な話し方やあいづちなどを使用する社会言語能力、動画の視聴においては母語話者同士の自然なスピードの会話を理解する聞き取り能力が必要となった。学習者のレベルによっては難しい課題もあったが、各自の能力に応じて取り組んでいた。

交流活動はシラバス全体に組み込まれており、この活動のみによる言語能力の伸長を示すことは困難である。しかし交流により日頃の学習成果を発揮する機会を得たことで、生の言語に触れる機会の増加だけではなく、学習意欲の向上その他様々な面において好影響があったと考えられる。

6. 課題点

このように SNS を使った異文化交流によって得られることは多いが、SNS の教育分野での利用については様々な課題点が考えられる。

まずはプライバシーに関する問題が挙げられるだろう。特に Facebook のような SNS には多くの個人的な情報が掲載されており、授業で使用するのに適当かどうかは人によって意見が分かれるところであろう。Blattner & Lomicka (2012) によるとアメリカでも Facebook を授業で使用することは未だ試行錯誤の段階であり、学生の受け止め方も様ではない⁽¹⁰⁾。今回の活動においても当初は参加者がプライバシーの設定を行うことを前提に Facebook を使用することも検討されたが、コース用に WordPress のサイトを立ち上げセキュリティを考慮した設定を行った方がいいとの結論に至った。プライバシーに対する考え方は人によって異なるが、教師はその点を考慮した上で適当な使用媒体やアクセスのレベルなどを選択する必要があるだろう。

また、語学教育の授業の一環として SNS を使用する場合はエラー訂正の方法を含め教師がどのような役割を担うかも課題の一つだろう。今回の活動はコミュニケーションを行うことに主眼が置かれていたため日本語教師はメタ言語的な介入は極力控えるようにしたが、教師は交流の機会を提供するだけではなく、活動をモニターし適当な形で学習者にフィードバックを与え学習効果を高める工夫が必要であろう。

SNS を使用した活動は手軽に参加ができるが、一方でその円滑な運営のためには事前の準備やスケジュールの調整などを綿密に行う必要がある。せつかくの書き込みもタイミングが合わない相手には届かない場合もあり、シラバス遂行の責任がある日本語教師は時差も考慮した上でコーディネーションを行う必要がある。多忙な日米の学生が交流活動に充てられる時間は限定されたものにならざるを得ないが、そのような条件下で効率的に交流を行うためには互いがコミットメントを持って参加することが成功の鍵と言えるであろう。

7. おわりに

SNS は多くの人にとってコミュニケーションの手段として不可欠なものになっており、外国語教育で SNS を活用することは今や必然とも言えるだろう。SNS 上で異なる言語や文化的背景を持つ人々に適切な態度で意見を表明したり共感を示したりすることは現代の重要なコミュニケーション能力の一つであり、本稿で報告した活動はそのような能力を養う一助になることが期待される。この異文化交流活動はささやかな試みではあるが、日常生活の中で文化背景の異なる相手との繋がり意識することは国際理解に向けての第一歩とも考えられる。このような活動の積み重ねが今後も自国と異なる文化に興味を持ち、理解していくための出発点になればと願うものである。

SNS は様々な可能性を持っており、今後外国語教育や国際理解教育に果たす役割は益々大きくなっていくだろう。一方で SNS は未だ進化中の媒体であり、その適切な使用法や教育的効果については常に検証を行っていく必要がある。今回の大阪教育大学とデューク大

学による日米異文化交流の試みも、日米双方の参加者にとってより実りの多い活動に進化、発展させるべく検討を重ねていきたいと思う。

参考文献

- (1) Zourou, Katerina: "On the attractiveness of social media for language learning: a look at the state of the art", vol.15 *Medias sociaux et apprentissage des langues* (2012)
- (2) 荒井秀二, 後藤英照: "小・中・高を結ぶ 英語教育と総合的な学習", 三省堂 (2000).
- (3) 篠崎文哉, 河合冬樹, 秋永真由子, 中野利香, 加賀田哲也: "英語科における国際理解教育の現状と指導の在り方", 英語授業研究会関西支部 1 月例会にて口頭発表 (2013).
- (4) 佐伯胖: "学びとコンピュータハンドブック", 東京電機大学出版局 (2008).
- (5) 吉田晴世, 松田憲, 上村隆一, 野澤和典: "ICT を活用した外国語教育", 東京電機大学出版局 (2008).
- (6) ラングクリス: "ソーシャル・ネットワーク・サービスのウェブサイト—Ning—を活用した英語教育環境の補助と広がり", 島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要, 47, pp.69-74 (2009).
- (7) 日木くるみ, Elizabeth Armstrong: "関西外大—バックネル大学 Facebook プロジェクト 2009—Facebook を使った実践的コミュニケーションの試み—", 関西外国語大学研究論集, 92, pp.171-184 (2010).
- (8) 塩見佳代子: "アメリカの大学生とのブログ交流と異文化コミュニケーション", 外国語教育メディア学会関西支部 2013 年度春季研究大会にて口頭発表 (2013).
- (9) Thome, Steven: "The Intercultural Turn and Language Learning in the Crucible of New Media", *Language, Literacies and Intercultural Learning in the 21st Century* (2010).
- (10) Blattner, Geraldine & Lomicka, Loara: "Facebook-ing and the Social Generation: A New Era of Language Learning", vol. 15 *Medias sociaux et apprentissage des langues* (2012).